

★追悼★

亀山純生さんへの追悼文

本学会の設立や理事として大きな役割を果たされた亀山純生さん（東京農工大学名誉教授）が、2023年10月28日に急性肺炎で逝去された。享年75歳であった。

亀山さんと私の付き合いは長く、大学紛争の60年代後半の京都大学時代には亀山さんは哲学科の1年下の後輩で、セツルメント活動や学生運動の仲間であった。また、東京農工大学時代には、研究・教育の同僚であり、農工大の改革に向けてともに活動した。また、本学会をはじめ幾つかの学会でともに研究活動をした。このように、実際、半世紀以上に及ぶ、身近で親しく付き合った仲間であった。それだけに予期しない早逝には残念な思いで一杯である。

亀山さんは多くの学会に参加していたが、その中でも、共生社会システム学会は、亀山さんにとって重要な学会の一つであったと思う。亀山さんの研究分野は多方面に及んでいるが、紙数の限りもあるので、ここでは、本学会に関係の深い「共生」を巡る分野・論点を中心に述べたい。

亀山さんは本学会に多くの貢献をされたが、私が特に印象に残っているのは、本学会創設10周年記念事業として『共生社会』（農林統計出版、2016）の二巻本の発刊が企画された際に、全体の構想は監修者として会長の私と副会長の矢口さんで行った（私はこの構想を明確にするために、前年に拙著『多元的共生社会が未来を開く』を出版した）が、第1巻の難しく重要な構成・執筆者の具体化は主に亀山さんが精力的に行ったといえる。そして、亀山さんの熱心さが皆さんに伝播して、学会の方向を確立することになったこの記念本の発刊を成功させるのに大きな貢献をすることになったと思う。

「共生」概念の探求に関しては、亀山さんと私の共同の長い研究テーマであ

り、それを様々な企画や実践を通じて深めてきたといえる。それは、たとえば、農工大の一般教育部の解体を伴う改革の際に農学部地域生態システム学科に人文社会系教員による「人間自然共生学講座」を設置したことに表れている。その名称には「人間と自然の共生」という言葉が反映されているのである。

亀山さんは、一般教育部解体の後、工学部所属から農学部所属に移って以降、教養教育の倫理学に加えて、環境倫理学の教育研究を専門にして、その一つの到達点として和辻哲郎などの批判を通じて「風土的環境倫理」という考えを提唱した（単著『環境倫理と風土——日本の自然観の現代化の視座』、参照）。この主張の大きな背景には「人間と自然の共生」や農的世界の重視があり、その風土的具体化であった。さらにいえば、亀山さんは北陸・七尾のお寺の住職（僧侶）であり、亀山さん自身がまさに七尾の風土的自然によって生まれたといえよう。私は、亀山さんのお父さんが逝去された際に、七尾のお寺の葬儀に参列したが、お寺の門から海の眺望があり、あの美しい風土的自然や人々の暖かさを忘れることができない（今回、七尾もまたあの能登大地震に襲われたが、一刻も早い復興を願わずにはおられない。ここで、改めて本学会の多くの会員が亀山さんの遺族救援募金活動に応募いただいたことに対して、改めて募金活動の発起人の一人としてお礼の言葉を述べたい。）。

ところでまた、1990年代以降、亀山さんと私は、吉田傑俊さん（法政大名誉教授）などと一緒に、故・卞崇道さん（元中華日本哲学会会長）をはじめとする中国の研究者たちとの共同研究を続けてきたが、その中で「共生」理念を巡る研究課題は日中お互いの共同研究の中核をなすものであるという認識で一致した。この共同研究は、北京と東京での「日中・共生シンポジウム」の開催などを通じて行われたが、この成果は共編著『〈共生〉思想の探求——アジアの視点から』（青木書店、2002）にあらわされている。この本では、中国側6人、日本側5人の論文が取められ多方面から「共生」理念が探求されている。この本に取められた亀山さんの論文「共生理念の深化と仏教思想の“参照点としての意義”」は、仏教の縁起思想との関連で興味深い議論が展開されている。残念なのは、卞崇道教授が早逝したことや日中の政治的関係の変化などもあり、こういった「共生」理念を巡る共同研究が本学会に継承できなかったことであ

る。

また、亀山さんと私は、共生社会のあり方を考える上で、〈農〉、特に農業のあり方が重要であるという共通認識に到るとともに、農業経済学の教員たちとそのような認識を共有して、共同で大学院に「共生持続社会学専攻」という新たな専攻を設置することができた。共生理念を〈農〉の問題と結びつけての共同研究もまた、亀山研究室と尾関研究室の大学院出身の若手も参加して進められ、2011年に『〈農〉と共生の思想——〈農〉の復権の哲学的探求』（共編著、農林統計出版）を著した。おそらく現代において哲学・思想関係者で〈農〉に焦点をあてて多面的な研究をしたのは、少なくとも日本ではあまりないのではないかとと思われるのである。

「共生社会システム学会」の創設の提起は、亀山さんと私にとっては、こういった営みとともにあったといえよう。亀山さんや矢口芳生さんや私など、それに著名な生物学者の小原秀雄氏や長野敬氏にも主要メンバーに加わってもらって共生社会システム学会が2006年に設立された（その趣旨は『共生社会システム学序説——持続可能な社会へのビジョン』（共編著、2007）参照）。

亀山さんの本学会への思い入れの強さと熱心さからすれば、当然に学会の会長を早い時期にやってもらうのは当然であったが、七尾のお寺と所沢の家との間を相当な時間をかけて車で行き来して住職と研究者の両立をはかっていたこともあり、なかなか難しい状況が続いてきたといえる。そして、それが実現される前に亀山さんを失ったことは私を含めて多くの学会のメンバーにとって大変残念なことであった。

亀山さんのユニークで大きな業績が、特に若手・中堅の方々に継承されることを心から期待したい。

心からご冥福をお祈りいたします。

2024年4月11日

東京農工大学

名誉教授 尾関 周二